

台湾の閩南語に就いて。 I

——発音・半鼻音・転調及び台湾語歌謡に

現われる「來」に就いて——

瀧澤英一

Über den Min-Nan Dialekt in Formosa (Taiwan). I ——Lautlehre, Halb-Nasal, Intonationstransformation, und die Bedeutung eines Wortes “Lai”, das in den Taiwanschen Liedern oft erscheint——

Éi Iti TAKIZAWA

§0. 序

閩南語は漢語族(シナ語族)の一支流(一方言)である。王育徳に依れば、台湾の現在の総人口1700万~1900万の約85%を占める native の台湾人(本省人)の中の更に85%を占める福建系台湾人の母語であり、広い意味での福建語(一名閩南語)に属する。閩南語は、福建省の南部(廈門方言)、広東省の東部(潮州方言)、海南島の東半分(海南方言)、浙江省の南部(浙南方言)、東南アジア(フィリッピン、マレーシア等)の華僑社会の約半分の人達、日本在住の台湾人、カナダとアメリカ(主として西海岸)に約20万居ると言われる台湾人を含めて、総計約4000万の人達に依って話されている大きな方言である。

王力は、漢語族(シナ語族)を五つの音系に大別した。官話音系、呉音系(蘇州語・上海語)、閩音系、粵音系(広東語)、客家語、である。閩音系は、官話音系、呉音系に次ぐ大きな音系である。又、閩音系は漢語(シナ語)の最も古い特徴を好く存している。

台湾で話されている閩南語には、不泉不漳 Put⁴-Chuan⁵ Put⁴-Chiong¹と言われている様に、泉州音と漳州音とが混在している。その原因としては、泉州府 Chuan¹-chiu¹-hu²と漳州府 Chiang¹-chiu¹-hu²の人々が台湾に移住して来た為に、夫々の出自の言葉が持ち込まれて混在した結果、現在の台湾語(台湾の閩南語)が出来上った。台北市では泉州方言の要素が強く、台南市では漳州方言の傾向が強い。

王育徳に依れば、泉州方言と漳州方言(及び潮州方言)とは6世紀頃に分岐し、漳州方言と潮州方言

とは7世紀頃に分れたとされる。17世紀頃に泉州方言と漳州方言とから台南方言が形成され、又、その頃に泉州方言と漳州方言とから廈門方言が生まれた。台北方言は泉州方言の要素が強く、それだけ廈門方言に近い傾向を持つ。

閩南語では、一個の漢字には(文言音)と(口語音)とが対応する。例えば、「雨」には u²(文言音)と ho⁷(口語音)との二種類の読み方が有る。「花當開」は hoa¹ tong¹ khai¹(文)、と hoe¹ tng¹ khui¹(口)、である。

語頭子音(声母)の中には、有気音と無気音の対立が有る子音も有る(後述)。

王育徳の研究に依れば、閩南語では口語音の上に文言音が被さって、現在の一字二音(一漢字に対して文言音と口語音との二つの発音が有る)が形成されたと云う。

漳州音と泉州音との違う例としては、(漳州音)の j は(泉州音)の l に対応する場合がある。

「今日日」kin¹-a²-jit⁸(漳州)は kin¹-a²-lit⁸(泉州)。
「風愈寒」hong¹ ju² koan⁵(漳州)は hong¹ lu² koan⁵(泉州)。

韻母の違う例としては

「鷄」ke¹(漳州)(台南), koe¹(廈門)(台北),
kəi¹(泉州), koi¹(潮州),

「洗」se²(漳州)(台南), soe²(廈門)(台北),
səi²(泉州), soi²(潮州),

「底」te²(漳州)(台南), toe²(廈門)(台北),
təi²(泉州), toi²(潮州),

などである。

閩南語は正書法が確立されていないので、一つの発音に対して種々な文字が使用されることも有り、又、当て字（音を借用した当て字や意味を借用した当て字、など）も使われている。例えば、e⁵「……の」という意味の「助詞」に対して、しばしば「的」が使われるが、これは当て字である。

漢字「的」の声調は入声であって、e⁵陽平の声調とは全く別のものである。王育徳は「兮」を使用している。今迄にも、多くの人達が種々な書き方の提案をしているが、現在でも正書法が未だ決められていない。音と声調は有っても、漢字が確定出来ないことが有る。例えば、「今迄に」と言う意味で、kau³-tan¹（口語）に対して、「够今」と書かれるが、「今」kin¹は当て字である。tan¹に対応する正当な文字は知られていない。

此处では、王育徳『台湾語入門』（1972年、風林書房）及び王育徳『台湾語初級』（1985年、日中出版）の漢字（シナ文字）を主として使用する。これは古音や中世音をも考慮して定められているからである。又、発音表示は、教会羅馬字と呼ばれているW. Campbell（甘為霖）『A Dictionary of the Amoy Vernacular（廈門音新字典）』（1924年、再版）のローマ字を主として採用する。この表示法は歴史が比較的長く、又、文献も多いからである。再度、「主として使用する」と述べた理由は、著者の見解に依り、一部分を訂正したからである。

本書では次の記号を用いる。

() は方言や文言音、口語音、等を示して、その区別を明らかにする為に用いる。例としては、(泉州)泉州音、(漳州)漳州音、(潮州)潮州音、(台北)台北音、(台南)台南音、(文)文言音、(口)口語音、等。

[] は国際発音記号での表示や文法的な説明に使用する。例としては、「紅色」ang⁵-sek⁴ [aŋ⁵-sek⁴]、「落葉」loh⁸-hioh⁸ [lo[?] 83.hio[?] 8]、「請」chhiaN² [ts'ia⁻²]、「看」khoaN³ [k'oa⁻³]、等。

[-?] は声門閉鎖を示す。[-'] は有気音、[-~] は鼻音（半鼻音）を表わす。又、[動] 動詞、[名] 名詞、[形] 形容詞、[助] 助詞、[量] 量詞、等。

§1. 発音

閩南語の発音の概略に就いては、この論文の理解を容易にする為に、王育徳『台湾語入門（前掲）』に従って述べる（§1及び§2に引用）。（台北）

閩南語の発音を声母、韻母、声調の三要素に分けて考えよう。一個の音節は、(声母)+(韻母)で構

成され、更にそれに声調が被さったものとして把握される。韻母は(介音)+(主母音)+(韻尾)と分解し得る。

1・1 声母（17種）

声母は語頭子音であって、計17種である。

- p [p] 軟らかい息のパ行の頭音。〔無気音〕
 ph [p'] 普通のパ行の頭音。〔有気音〕
 [-'] は有気音を表す。
 b [b] ベ行の頭音。〔濁音〕
 m [m] マ行の頭音。〔鼻音〕
- t [t] 軟らかい息のタ、テ、トの頭音。〔無気音〕
 [ts] では無い。
 th [t'] 普通のタ行の頭音。〔有気音〕
 l [l] ラ行の頭音。日本語の[r]でなくて[l]。
 n [n] ナ行の頭音。〔鼻音〕 「台日大辞典」では「ヌ」と表示する。

破裂摩擦音

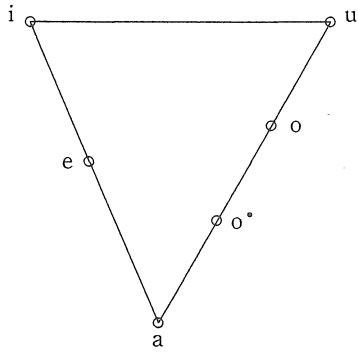
- ch [ts, tɕ] チ、ツの頭音。〔無気音〕
 chh [ts', tɕ'] 強い息のチ、ツの頭音。〔有気音〕
 j [dz, dʒ] ザ行の頭音。〔濁音〕
 s [s, ɕ] サ行の頭音。
- k [k] 軟らかい息のカ行の頭音。〔無気音〕
 kh [k'] 普通のカ行の頭音。〔有気音〕
 g [g] ガ行の頭音。〔濁音〕
 ng [ŋ] 鼻に掛ったガ行の頭音。〔鼻音〕
 h [h] ハ行の頭音

1・2 韻母（41種）

入声を除いて全部で41種、原則として、(介母)+(主母音)+(韻尾)から成る。介母は介音とも言う。主要なものは主母音で、6種類有り、第1図の様に分類される。

主母音

- i [i] 鋭いイ。
 e [ɛ] 鋭いエ。フランス語のéに近い。
 e [a] ア。日本語のアに近い。
 o' [ɔ] 広いオ。日本語のオに近い。
 o [o] 狭いオ。日本語のヲに近い。台日大辞典ではヲと表示される。
 u [u] 鋭いウ。《泉州方言》にはドイツ語のü [i]



第1図 主母音

に近い音が有る。

主母音をも含めて、韻母は次の様に整理される。

陰韻 (16種)

a	ai	au	e	o°	o
[a]	[ai]	[au]	[ɛ]	[ɔ]	[o]
i	iu	ia	iau	io	
[i]	[iu]	[ia]	[iau]	[io]	
u	ui	oa	oai	oe	
[u]	[ui]	[oa]	[oai]	[oe]	

半鼻韻 (10種)

aN	aiN	auN	eN	o°N
[ã]	[aĩ]	[aũ]	[ẽ]	[õ]
iN	iuN	iaN		
[ĩ]	[iũ]	[iã]		
oaN	oaiN			
[oã]	[oaĩ]			

台湾語の特徴の一つで、陰韻を鼻にかけて発音する。-N は半鼻音の記号であり、-N の前の母音が半鼻韻化されることを表す。教会羅馬字では発音表示のローマ字の後に上添号^ㄣを用いているが、此处では-N を付ける。半鼻音は聞き手の聴覚に「甘い」響きを与える。

陰韻と半鼻韻には原則として-h [-ʔ] (声門閉鎖) に終る入声 (にっしょう) が対応する。

陽韻 (13種)

am	an	ang	eng	ong	
[am]	[an]	[aŋ]	[eŋ]	[oŋ]	
im	iam	in	ian	iang	iong
[im]	[iam]	[in]	[ian]	[iaŋ]	[ioŋ]
un	oan				
[un]	[oan]				

陽韻入声

ap	at	ak	ek	ok	
[ap]	[at]	[ak]	[ɛk]	[ok]	
ip	iap	it	iat	iak	iok
[ip]	[iap]	[it]	[iat]	[iak]	[iok]
ut	oat				
[ut]	[oat]				

此等の入声では、[-p], [-t], [-k] の音は殆ど聞き取れない程度であるが、時としては明瞭に聞こえることが有る。

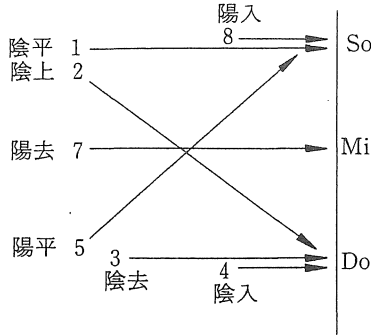
声化韻 (2種)

m	ng
[m]	[ŋ]

此等の声母と韻母とを組合せて一つの音節を作るのであるが、李思敬：『音韻』(1985年、商務印書館)は、漢語(シナ語)の一音節を表示するのに、(声母)+(介音)+(主母韻)+(韻尾)の4個の座を用意する。閩南語でも、声門閉鎖記号hと半鼻音記号Nとを韻尾に含めて、4箇の座を用意すれば好い。例えば、「中」t+i+o+ng, 「黃」φ+φ+φ+ng, 「唔」φ+φ+m+φ, 「姓」js+φ+i+N, 「情」ch+φ+e+ng, 「東」t+φ+a+ng, 「着」t+i+o+h, 「菜」chh+a+i+φ, 「人」l+φ+a+ng, 等である。φ はゼロ記号である。

1・3 声調

声調は七声(七種類)を区別し、他に軽声が有る。声調はローマ字発音表示の終りに数字(上添記号)で示す。(第2図参照)



第2図 声調表

1. 高平調（陰平） 高く平らに。
So 音程度の高さ。
2. 下降調（陰上） 高い所から急に下がる。
So 音から Do 音に。
3. 低平調（陰去） 低い所で下り気味に。
Do 音の高さ。
4. 低平短調（陰入） 低く短促に。Do 音の高さ。
5. 上昇調（陽平） 低い所から高く上る。
Do 音から So 音へ。
7. 中平調（陽去） 中位の高さで平らに。
Mi 位の高さ。
8. 高平短調（陽入） 高く短促に。So の高さ。
0. 軽声 第3声と第4声の中間位で、弱く。
第6声（陽上）は、現在では第2声（陰上）と合
同しているので、声調の種類は七声となっている。
（潮州方言）では第6声（陽上）が保存されている。
教会羅馬字の声調符号では

1. 記号無し
2. /
3. \
4. 記号無し
5. ^
7. -
8. !

である。台日大辞典（上巻1931年，下巻1932年，台
湾総督府）の声調符号では

1. 記号無し
2. /
3. \
4. /
5. <
7. |
8. 、

である。半鼻韻を伴うものは

1. ǃ
2. ǃ
3. ǃ
4. /
5. <
7. |
8. ǃ

と記される、

第4声（陰入）と第8声（陽入）の話は-p, -t, -k, -h [-?]で終る。此等の中世音（隨代の切韻，宋代の廣韻）の入声（にっしょう）に対応する。閩南語では古音がよく保存されているので，日本で云う漢詩（近体詩）や詞（ツッ）を作る時には，閩南語の発音（声調）をそのまま踏襲すれば，詩や詞（小唄）の平仄式に合致させることが出来る。即ち，第1声（陰平）と第5声（陽平）とは平声であり，他は仄声である。押韻も容易である。共通語（普通話）の基礎となった官話系の方言の発音と声調とは古音や中世音と比べると非常に変化しているので，此等の声調そのままでは，詩や詞の平仄式に合致させることが出来ない。声調や音が変化した主な理由は，異民族（漢族ではない人達）の支配の為であると言われている。

§2. 転調

音節（文字）が単独に現われる場合には，上記の様であるが，音節（文字）が二個以上強く連結している場合には，即ち，複音節の単語や（構造）（文章など）であったりする場合には，複雑な転調（Intonations-transformation）の現象が起こる。

二音節語を例に採って述べることにしよう。二音節語は，それ自身で一つの纏まった単位であるので，一つのアクセント核を持つ。このアクセント核は原則として第2音節（軽声音部を除いた最終音節）に有る。このアクセント核は，本来の声調を保つ為のものであって，第1音節には転調が起こることになる。

転調の法則は次の様である。

第1声>第7声「風吹」hong¹⁷-chhe¹（風）

第2声>第1声「早起」cha²¹-khi²（朝）

第3声>第2声「相簿」siong³²-pho^{*7}（アルバム）

第4声>第8声「即満」chit⁴⁸-ma²（今，いま）

「結婚」kiat⁴⁸-hun¹（結婚）

第5声>第7声「縁投」ian⁵⁷-tau⁵（見目好い）

第7声>第3声「父母」pe⁷³-bu²（父母）

第8声>第4声「熟似」sek⁸⁴-sai⁷（知り合いの）

「賊仔」chhat⁸⁴-a²（泥棒）

—p, —t, —k で終る入声(第4声と第8声)は互に入れ換わる(4→8, 8→4)が, —h で終る入声は〔—?〕の為に特別な転調をする。

第4声>第2声「桌頂」toh⁴²-teng²(机の上)
 「拍算」phah⁴²-sng¹(段取りをす

る)
 第8声>第3声「食錢」chiah⁸³-chiN⁵(汚職をす
 る)

「笠仔」loeh⁸³-a²(笠)
 「月暝」geh⁸³-mi⁵(月夜)
 「月光」geh⁸³-kng¹(月光)

但し, 本来の2声, 3声よりは短く聞える。

又, 軽声音節はその本来の声調が失われる為に, 前の音節にアクセント核が来る。

「後日」au⁷-jit⁸⁰(明後日)

(参考)「後日」au⁷⁴-jit⁸(後日)

「無去」bo⁵ khi³⁰(無くなる)(助ける構造)

(参考)「無去」bo⁵⁷ khi³(行かなかった)(存現構造)

(構造)(文章など)では, あたかも一つの複音節語の様に, 一つのアクセント核で統括されるので, 長い文章では幾つかのアクセント核が認められる。例えば

李仔/歹果子, /唔通食多./

Li²¹-a²/phaiN²¹ ke²¹-chi², /m⁷³-thang¹⁷
 chiah⁸³ choe.⁷/

すもものは悪いくだものだから, 沢山食べてはいけない。

斜線で, 夫々のアクセント群を示す。「仔」a², 「子」chi², 「多」choe⁷, が夫々核音節となっている。

§3. 方言の差異

台湾の中での方言の差異を明らかにする為に, 村上嘉英『現代閩南語辞典』p.522—524, を引用する。(泉州方言)に近い(台北方言)と, (漳州方言)に近い(台南方言)とを対照する。

(台北) (台南) [例]

韻母は

e	oe	尾, 未, 吹
eh	oeh	月, 説, 襪
i	e	暝, 姉, 撼
i, u	i	猪
i, u	u	煮, 女, 舉
iN	eN	星, 青, 平
iN	i	婁
iu	io	秋
iu	io [˙]	量, 兩

oe e 鷄, 買, 賣, 多

oe o 做

oeh eh 八, 節, 塞

oeh, eh eh 要, 笠

u o 母

ui oe, oai 每, 梅, 媒

uih oeh 血, 拔

un in 均, 銀, 斤, 根, 巾

声母は

t, ch ch 查(一哺)

p t 枇(一杷)

th chh 俎(一俎)

j, l j 日, 愈

であるが, 人に依っては声母や韻母が必ずしも同一とは限らない。例えば, 「日」をjit⁸と発音したり, 時としては同一人が, lit⁸と発音したりして, 発音に揺れが起る場合も有る。

§4. 台湾の閩南語歌謡に現われる「來」に就いて

「來」lai⁵は, 普通は〔動詞〕, 〔接続詞〕, 〔感嘆詞〕として, 次の様に使われる。

村上嘉英編: 現代閩南語辞典(1981年, 天理大学おやさと研究所発行, 天理大学出版部)を引用しよう。

〔動詞〕① 來る。

今仔日伊那無來。Kin¹-a²-jit⁸ i¹ na²
 bo⁵ lai⁵?

今日彼は どうして來なかつたんですか。

② ください〔数に関する命令文の場合にだけ使われる〕。

麵兩碗來, Mi⁵ nng⁷-oaN² lai⁵。

うどんを二杯下さい。

③ ……してくる。〔動作・状態が話手の居る所へ向って來ることを表わす。〕陳輝龍『台湾語法』(1934年初版, 再版; 1936年第3版, 台湾総督府無名会)は〔添意動詞〕と名づける。

鳥仔飛來。Chiau²-a² poe¹-lai⁵。

鳥が飛んで來る。

日頭出來。Jit⁸-thau⁵ chhut⁴-lai⁵。

太陽が出て來る。

④ ……出来る。常に「會」e⁷(出来る), 「無會」boe⁷(出来ない)と共に使われる。やりとげることが出来る意。

讀會來。Thak⁸ e⁷ lai⁵。

読むことができる。

講攏無会得來。Kong³ long³ be⁷ tit⁴ lai⁵。

さっぱり話せない。

⑤ ……しようではないか。〔誘う意を表わす。〕

咱來歇睏。Lan² lai⁵ hioh⁴ khun³。

お互に休もうではないか。

〔接続詞〕……して……。〔二つの動作を接続する。〕

起火來煎滾水。Khi² hoe² lai⁵ choaN¹ kun²-chui²。

火を起こして、湯をわかそう。

擲刀來削。Giah⁸ to¹ lai⁵ thai⁵。

刀を持って切りつける。

〔感嘆詞〕さあ。〔人を誘いせきたてる時に使われる。〕

來，飲一杯。Lai⁵, lim¹ chit⁸ poe¹ !

さあ，一杯飲んで。

來噢，趁燒。Lai⁵ oh⁴, than³ sio¹。

さあさあ，冷めないうちに。

來來。一杯，Lai⁵ lai⁵, chit⁸ poe¹。

さあさあ，一杯。

更に〔熟語〕としては

「來客」lai⁵-kheh⁴〔名詞〕來客。

「來賓」lai⁵-pin¹〔名詞〕來賓。

「來去」lai⁵-khi³〔名詞〕行き來。

〔名詞〕行き來。「有來去」u⁷ lai⁵-khi³（行き來が有る）

〔動詞〕

① 行く。坐電車來去 Che⁷ tian⁷-chhia¹ lai⁵-khi³。

電車に乗って行こう。

② ……していく。

我走來去，給看一下。

Goa² chau² lai⁵-khi³, ka⁷ khoaN³ chit⁸-e⁷。

私が走って行って，一寸見て來ます。

我即滿要轉來去食飯。

Goa² chit⁴-ma² beh⁴ tng² lai⁵ khi³ chiah⁸ png⁷。

私は今から戻って食事をしようと思いません。

「來歴」lai⁵-lek⁸〔名詞〕來歴，經歷。

「來往」lai⁵-ong²〔名詞〕往復。

來往着幾日。Lai⁵-ong² tioh⁸ kui² jit⁸?

往復には何日かかりますか。

〔動詞〕=往來 ong²-lai⁵行き來する。

「將來」chiong¹-lai⁵〔名詞〕將來

しかし，「來」lai⁵には，次の様な使い方も有る。

「來」+〔動詞〕の例である。歌謡の句を多く採用した。

イ) 自由夢，與人(啊)來所害。chu⁷-iu⁵-bang⁵, ho⁷ lang⁵ (a⁰) lai⁵ so²-hai⁷。

ロ) 將阮來放離。chiong¹(文)gun² lai⁵ pang³ li⁷。

ハ) 我比蝴蝶，妹妹來比桃花。moe⁷-moe⁷ lai⁵ pi² tho⁵-hoe¹。

ニ) 夭寿尖山(啊喂)來鎮中央。iau⁷-siu⁷ chhiam¹-soaN¹ (a¹-uei⁰) lai⁵ tin³ tiong¹-ng¹(文)。

ホ) 隔日，要轉來去啦。keh⁴-jit⁸, beh⁴ tng² lai⁵ khi⁰ la⁰。

ヘ) 去新市仔，落車，來就用行兮啦。

khi³ Sin¹-chhi⁷-a², loh⁸-chhia¹, lai⁵ chiu⁷ eng⁷ kiaN⁵ e⁰ la⁰。

ト) 為娘仔假愛，來食虧。

ui⁷ niu⁵-a² ke²-ai³, lai⁵ chiah⁸ khi¹(文)。

チ) 等待何時，君來採。tan²-thai⁷ ho⁵-si⁵, kun¹ lai⁵ chhai²。

イ)~チ)の句の中の「來」lai⁵は，無くても，意味が通じる句も有る。歌謡や会話であるから，一つには

ア) 文章(句)の調子を整える為に挿入されたことも有るであろう。閩南語を母語とする二三の人達に質問しても，この様な答が返って來る。しかし，この「來」は

バ)〔近い将来〕を表すと考えられる。イギリス語やドイツ語の〔意思未来〕や，〔單純未来〕を表す〔助動詞〕，若くは陳輝龍の言う〔添意動詞〕と名づけたら好いであろうか。但し，この場合の「來」は〔動詞〕の前に置かれる。意味は「これから……する」。

イ)は「人に依ってこれから妨害(邪魔)される」。ロ)は「私を放り出そうとする」。ハ)は「妹妹(若い娘)は桃花に比べられよう」。ニ)「夭寿尖山は中央に鎮座している」。ホ)は「翌日はもう帰らなくちゃいけない」。「來」は「これから」，「要轉」は「戻ろうとする」，「去」は行く。「啦」は〔語氣詞〕。

ヘ)「新市へ行き，(新市で)車をおりた後は，もう歩くしかないのである」。

「落車」は「下車する」，「來」「これから」，「就」すなわち，「用」つかう，「行」歩く，「兮」と「啦」とは〔語氣詞〕である。ト)は「あの娘(の為)に懸想して，何も食べられない」。「來」は「仮愛」と「食虧」との二つの〔動詞〕を接続する〔接続詞〕と考えて好いであろう。チ)は「早く私を摘みに來て」。

「等待」待つ。「何時」いつの時。「君」きみ、あなた(男)。「來採」摘みに來る。「來」は〔動詞〕。「來て摘む」か。「これから摘む」か。

「來」の役割はい)では〔單純未來〕。ロ)では語調を整える為に使われている。又、「これから」。ハ)では二つの〔動詞〕「比」と「比」とを接続する〔接続詞〕。ニ)では語調を整える為に。〔未來〕とは考えられないから。ホ)では「これから」〔未來〕。前出の「來去」の〔動詞〕②の例文の「來」も「これから」と解する方が好いか。「來去」は「これから行く」。ヘ)では「これから」。「就」は「そこですなわち」。

ト)「來」+「食虧」は「來」の結果として「食べられない状態になっている」か? 「來」は〔動詞〕か、〔接続詞〕か? チ)〔動詞〕。

更に他の例としては

扭起來拍 khiu² khi² lai⁵ phah⁴。

引張り上げてなぐろう。

が有る。扭 khiu² (力強く) 引張る。「扭起」引張り上げる。陳輝龍は、この「來」を〔添意動詞〕としているが、扭起〔動詞〕と拍〔動詞〕との〔接続詞〕としての「來」の役割よりも、むしろ〔意思未來〕の要素が強いものと思われる。〔誘う意向〕も有るか?

來坐 lai⁵-che⁷!

お座りなさい。いらっしゃい。

の「來」には〔添意動詞〕としての役割の他にも〔感嘆詞〕(呼びかけ)の役割も有る様に思われる。

此等の例を考えると、「來」+〔動詞〕の「來」には、

- a) 語調を調えるために使われるもの。
- b) 〔近未來〕を表わすもの、即ち「これから……する」と和訳出来るもの。〔意志〕を表わす。
- c) 〔動詞〕と〔動詞〕を接続する〔接続詞〕として使用されるもの。
- d) 〔動詞〕としての役割を果すもの、即ち、陳輝龍の云う〔添意動詞〕としての役割を果すもの。
- e) 「……しようではないか」と誘う意向を表わす〔動詞〕としての働きをするもの。

が有ることが知られる。

文 献

村上嘉英『現代閩南語辞典』1981, 天理大学おやさと研究所, 奈良。(台南)(台北)

王育徳『台湾語入門』1972, 風林書房, 東京。(台北)

王育徳『台湾語初級』1983, 日中出版, 東京。(台北)
陳輝龍『台湾語法』1934初版, 再版, 1936改訂3版, 無名会, 台北。

黃澹川『増補鼻音妙悟』光緒乙巳, 會文書莊, 厦門。(泉州)

謝秀嵐『増註殊十五音』會文堂, 厦門。(漳州)
著者不明『彙集雅俗通十五音』慶芳書局, 高雄。(漳州)

台湾総督府『台日大辞典』1931上巻, 1932下巻, 台北; 1981影印本, 衆文図書, 台北。『台湾語大辞典』と改称して, 1983影印, 国書刊行会, 東京。

甘為霖『厦門音新字典』1913初版, 上海, 即ち W. Campbell『A Dictionary of the Amoy Vernacular』1924再版, 上海。

台湾総督府『日台小辞典』1908, 大日本図書, 東京。
台湾総督府『台日小辞典』1932, 台北。

台湾総督府『台湾俚諺集覽』1914, 台北。

李猷章『福建語法序説』1950, 南風書局, 東京。
J. Macgowan『English and Chinese Dictionary of Amoy Dialect』1883, Trubner, London; 1978影印本, 南天書局, 台北。

K. T. Tân『A Chinese-English Dictionary —Taiwan Dialect—』1978, 南天書局, 台北。
董同龢, 趙榮琅, 藍亞秀『記台湾的一種閩南話』1967, 中央研究院歷史語言研究所单刊, 甲種之二十四, 台北。

董同龢『厦門方言の音韻』董同龢先生語言学論文選集 p.275~p.297, 1974, 食貨出版, 台北。

蔣克秋『实用英厦辞典』即ち

Chiang Ker Chiu『A Practical English-Hokkien Dictionary』勤奮書局 Chin Fen Book-store, Singapore。

連横『台湾語典』1957, 1977, 台北。

張振興『台湾閩南方言記畧』1989, 文史哲出版, 台北。

羅常培, 周辨明『厦門音系』1975, 古亭書屋, 台北。
丁邦新『台湾語言源流』1979, 學生書局, 台北。

鄭良偉, 鄭謝淑娟『台湾福建話の語音結構及標音法』1977, 學生書局, 台北。(台南)

鄭謝淑娟『台湾福建話形容詞的研究』1981, 學生書局, 台北。

蔡培火『国語・閩南語対照常用辞典』民国58, 正中書局, 台北。

李木杞『国台音通用字典』民国52, 瑞成書局, 台中。

D. Maciver, M. C. Mackenzie『A Chinese-English Dictionary—Hakka-Dialect—』1926,

- Presbyterian Mission Press, Shanghai.
- Thomas H. Roberts 『Speak Taiwanese』 1964,
1965再版, Taipei Language Institute, 台北。
- Tsoân Su 『Iâ-So̍ Ki-Tok ê Sin Lok (新約)』
1935, Seng-Chheh Kong-Hōe Oah Pan In,
Siōng-Hái。
- 林紹賢, 林紹豪助『实用台語會話』 1950, 台灣書店。
徐輝浩『实用台語會話』 1980, 華星出版社。(廈門)
片岡巖『台灣風俗誌』 大正13, 台灣日日新報社, 台
北。
- 雜誌『民族台灣』第1卷第1号(昭和16年7月)~第
5卷第1号(昭和20年1月), 東都書籍, 台北。
- 吳瀛濤『台灣民俗』 民国59, 古亭書屋, 台北。
- 池田敏雄『台灣の家庭生活』 昭和19, 東都書籍, 台
北。
- 堀川安市『台灣的植物』 昭和18, 東都書籍, 台北。
- 蔡俊明『潮語詞典』 1976, 三民書局, 台北。
- 岩崎敬太郎『日台言語集』 大正2, 日台言語發行所,
台北。
- 陳金田『台灣童謠』 民国70, 大立出版社, 台北。
- 岩永六一『台灣言語集』 明治28, 中村鐘美堂, 大阪。
- 李春霖『台灣語』 民国38年, 經緯書局, 高雄。
- 石川敏男, 白川宣力『海外旅行會話辭典, 台灣編』
1989, 昭文社, 東京。
- 劉文三『台灣宗教藝術』 民国72, 雄獅圖書, 台北。
- 洪惟仁『台灣禮俗語典』 民国75, 自立晚報社, 台北。
- 臧汀生『台灣閩南語歌謠研究』 民国66, 台灣商務印
書館, 台北。
- 鮎澤蒼史『茉莉—閩南語歌謠集一』 1991, 私家版,
名古屋。
- 黃國隆, 李中成, 林金波『台灣鄉土歌謠選集』 民国
68, 衆文圖書, 台北。
- 林二, 簡上仁『台灣民俗歌謠』 民国69, 衆文圖書,
台北。(説明文に反日的言辭多し)

(1992年2月20日受理)